

多様化する活動

2014年～

2014年度はつちのいえが始まって6年目。参加者のほとんどは、「授業」ではなく「プロジェクト」としてのつちのいえの成り立ちを知らない。「自然素材や環境を活かした空間表現」というおおまかなテーマで自由に作業する中から、つちのいえのエッセンスや可能性に気づいてくれるのを待つしかない。気づいた者は、たいてい半年間という授業の枠を越えて、通年ないし2年以上に

渡って作業を続ける。

2014年度は参加者が多く、各自やりたいことをプレゼンし合い、複数の作業班で同時並行的に作業を進めることにした。

- たたき隊(土間づくり/2013年より継続)
- 近づき隊(階段・前庭・土ベンチづくり)
- 部屋増やし隊(ツリーハウスづくり)
- 茶庭づくり隊(茶道部室横)

近づき隊

2014～2015年度

監物紗羅(日本画)、吉川昌(同)、平野佑季(環境デザイン)らが中心になって、丘に上る北側斜面に階段をつくる。

また、つちのいえの前のスペースを整備して、土のベンチのある広場をつくる。

大量の日干レンガをつくる必要があり、夏休みも自主的に作業を続けた。

また土ベンチは野外設置であるため、防水対策が必要で、漆喰を研究し、手作りするを試みた。

2年越しの作業となった。



急な北側斜面に割竹で階段をつくる。



土ベンチの位置に、水と縁切りのため石を敷き並べる。



2014/3/26

土ベンチは、丘の北西側に大きなカーブを描いてつちのいえの前庭空間を区切る。ベンチとしてのかたちだけでなく、風景との関係も重視した。



ひたすら日干レンガづくり。布を用いて土ブロックを型枠から外しやすくし、効率アップ。



2014/9/9

RCAの交換留学生ザーリヤ（建築専攻）も作業に参加した（2014年10月～）。



2014/10/15

日干しレンガづくり



日干しレンガを積んでいく



レンガどうしを圧着させるために足でコンコンとやる。



泥糊をたっぷり。どどん積み上げる。

独自の土漆喰をつくる

「作り方は、細かく砕いた土と砂と生石灰を10:10:3で混ぜ合わせ、ほぐした麻紐も加えます。塗りやすい硬さになるまで水を入れて練ります。水を加えて練っている時点で熱を発生するので（湯気が出るぐらいの温度でした）、20分ほど反応を起こさせてある程度落ち着いたら塗りに入ります。ベンチに水を含ませ、表面にキズをつけてから塗ります。土が乾くと白っぽい仕上がります。一旦全体を下地として塗ったあと、陶磁器を埋め込みながら仕上げていくつもりです。」—平野佑季（環境デザイン4回生）



漆喰は市販のものではなく、自ら工夫してつくる。



土漆喰を塗り付ける。



2016/2/12

背側はガラスを混ぜ込んだ土漆喰の洗い出し。表側は陶器片をガウディ風に埋め込む予定だったが、時間不足で実現できなかった。

2016年2月12日、作品展の際に公開されたときの土ベンチ。2020年現在、かたちは崩れて土に還っている。

部屋増やし隊

2014年度前期

大原野の大工・大五さん (p.41) からいただいた曲がり木などを使って、樹上にテラス(居場所)をつくることを試みる。シラカシの木に曲がり木や角材を引っ掛け、ロープで固定するが、居心地のいい空間をつくるまでには至らず、中途半端に終わった。のちにしばしば試みられるツリーハウスの第一作。



樹上で昼寝し隊

2015年度前期

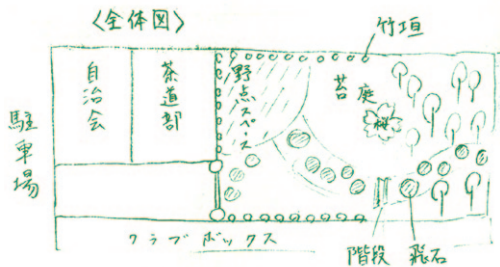
2015年度もメンバーを変えて、ツリーテラスづくりが試みられた。シラカシの枝ぶりを読み取り、螺旋状に階段をつくったり、棚をつけるなど、水平面を樹上に生み出すコツをつかみ、梁を取り付けて小さな床面を実現するところまでいった。だが、作業は毎回ぶっついで、全体は未完に終わった。



茶庭づくり隊

2014~2015年度

茶庭づくり隊の活動場所は、つちのいえから離れた彫刻棟北側のクラブボックスの裏。貧相なプレハブ小屋が建ち、自治会と茶道部の部室になっていた。提案者の高橋めぐみ（日本画専攻）が茶道部長で、プレハブ横のゴミと枯葉がたまったスペースを、苔山や飛び石、野点スペースのある茶庭に変えようと、数人が動き出した（右図：当初のプラン）。



クラブボックスの横も、捨てられたものが散乱していた。積もったゴミと枯葉の交じり合った土をこそげとって下地づくり。前期を通じて、片づけや掃除、道具や場所の手入れに時間を費やす。だがそうした下準備の過程こそが場所の認識を深め、対応力に富んだ創作活動を導いていく。



茶庭の垣根や庵は、竹でつくることにする。竹の扱いに関して、向日市の大塚竹材店を自主見学。耐久性をよくするため、竹を燻すことを学ぶ。実際の燻しには、火の扱いに慣れた陶磁器専攻の下村一真が奮闘。まずは無愛想なフェンスを竹垣で覆う。のち庵の柱や屋根に使う竹にも同じ処理をほどこす。多様な技術とアイデアが専攻を横断する。



竹を燻す。陶磁器棟の中庭で。



様式をふまえた竹垣。入口にもつくった。



近づき隊と同じく、茶庭づくり隊も夏休み返上で作業。

東屋をつくるために、つちのいへの横に生えているシラカシの巨木の枝を切り落とし、茶庭まで台車で運ぶ。枝の見立てが成功し、大きなカーブが東屋の予定スペースにすっぽりはまる。



うえし 植治・11代目小川治兵衛先生 来たる

2014年7月24日(木)

植治7代目小川治兵衛は、無隣庵をはじめ、明治～大正期に岡崎の別荘庭園群を一手に手がけた日本近代造園のパイオニアだ。11代目小川治兵衛先生は、1966年に京都芸大日本画専攻を卒業され、家業を継がれた。

小川先生とは、2010年夏、井上が国立近代美術館前で《アクアカフェ》を制作中に初めて出会った。アクアカフェは、琵琶湖疏水から引き入れた水を疏水に還す点など、植治・造園の手法を取り入れていた。以来、いつかつちのいえにお呼びしようと思いつきながら、機を逸していたが、庭づくりが始まり、ついに母校にお越しいただくことができた。庭にする場所をよく見て、すでにそこに在るものを活かすこと、短所から可能性を引き出すこと・・・先生の発想はものにとらわれず、自由奔放でやわらかい。「庭に完成はない」という本質的な話から、樹木を剪定して周りの風景を庭に縫いつなげていくコツなど、深遠な内容を平易でときにユーモラスな言葉で話される。まるで施主と対話するように、質問する学生一人一人との対話を大事にされる。さらに、学生一人ずつにサイン入りのご著書を下さった。





1



2

茶庭づくり隊は主に4回生なので、大学院入試の前後の時期は作業をさけた。

1_学内(もっぱら彫刻棟)から集めた石を並べてみる。(2014/9/19)

2_部室の壁を背につくる庵の屋根の大きさや傾斜を体で決める(2014/11/16)

3_屋根に使う竹を燻す膨大な作業量に疲れ果てる(2014/11/17)

4_庵の躯体を組んだところ(2014/11/20)



3



5



4

5_半割りにした竹で屋根をつくる。作業はときに深夜に及ぶ(2014/12/3)



6



7

6_2月の作品展後に作業再開。床の基礎をつくり、床板をはる。(2015/3/9)

7_床板の上は三和土で仕上げる。作業は夜に及ぶ(2015/3/9)

左：茶庭の決め手となる苔山のための苔を学内から集める。
つちのいえの丘にも、あちこちにいい苔がある。



右：移植された苔が、茶庭でどんどん増殖する。
クラブボックスの北側なので直射日光はささないといえ、苔山の維持のためには手入れが欠かせない。
「庭に完成はない」——小川治兵衛先生がいわれたことは、自然素材でできたつちのいえそのものにもいえる。



茶庭 お披露目茶会 2015年3月22日(日)

2～3月の作業の甲斐あって、苔山も三和土床の庵もかたちをなし、年度内に茶庭をお披露目することができた。

お披露目茶会には、竹でお世話になった大原野花トピアの畑さんご一家をはじめさまざまな方が来てくださった。畑さんの竹林からは、つちのいえだけでなく、総合基礎でもたびたび竹をいただく。



茶席のしつらえ：座布団は赤いフェルトを丸く切り、お菓子は梅ヶ枝餅（あんこ餅を焼いたもの、太宰府天満宮の名物）の桜餡版をつくり、茶碗は陶磁器専攻の下村一真が当日に蒸出したものをを用いた。





2020年末の茶庭。高橋めぐみと児嶋優美が卒業後も定期的に入手入れている、苔山などもきれいに維持されている。

つちのいえの茶庭

高橋めぐみ

2013年参加
2015年日本画専攻卒業
2016年より造園植治に勤務

クラブボックスの間の道を進むと、茶庭がある。ここはかつて、ゴミが大量に棄てられていた廃墟を、つちのいえ有志で茶庭につくり変えた場所である。

学生のころ茶道部部長だった私は、部室の外にあるベニヤ板壁の向こうが何なのか気になっていた。ある時見てみると、得体の知れない物が積み重なり、先が何も見えない状態である。その旨を教務課に伝えると危険と判断され、ゴミ撤去業者に依頼して頂けることとなった。ゴミが撤去されたそこには、十畳ほどの空地が現れていた。ここに茶庭があれば素晴らしいに違いない!と思った私は、つちのいえでの茶庭制作を提案し、有志で茶庭制作ができることとなったのだ。

こうして始まった茶庭づくりだが、土の中にはまだゴミが埋まっており、土地整備に多くの時間が費やされた。同時進行で苔の築山や東屋、竹垣、飛び石の配置などを考え制作し、徐々に庭はつくられていく。そして一年後には、なんとかおひろめ茶会を開くこともできた。制作中の反省点や後悔も未だに多くあるが、それも含めて、廃墟を庭につくり変え、光や風が通り、人が集える場所にできたのは、私にとってかけがえのない経験となった。

現在の私は、造園植治・小川治兵衛氏の下で働いている。氏には一度、茶庭制作中に指導に来て頂いたことがあり、私の求職と、氏の求人とのタイミングが重なり、造園植治に入社することとなったのだ。日々、お施主様の庭園維持・管理をしている中で、氏からは技術的な指示は勿論あるが、掃除から始まる一つ一つの作業の根本的な意味や、庭づくりに携わる上で心構え等も教えて頂いている。氏によって何十年と手入れされ続けている庭園に関わっているのは、ありがたいさか無い。(治兵衛氏はご自身そのものがお庭だと、私は思っている)



2014年7月24日、小川治兵衛氏が茶庭に來訪されたとき。このときが初対面。

さて現在の茶庭だが、私は少しずつの変化が面白く、卒業後も定期的に入手入りに来ている。時折、後輩達がここで写生をしたり、休んでいたり談笑しているのに出くわすことがある。そのとき私は、ここに茶庭をつくり、手入れを続けていて良かったと、心から思う。